

中古漢字音節表解説

この中古漢字音節表(以下本表)は、藤堂明保編「学研 漢和大字典」学習研究社(1978)(以下藤堂)の本文及び付録の「中国の文字とことば」の記載に基づいて作成した。目的は、中古漢字の声母及び韻母の種類及び数並びに総音節数を知ることである。

(1)基礎事項

中国語の音節は、声母及び韻母からなる。たとえば「官」及び「良」という漢字を発音記号で表すと、右の表(1)-aに示すようにそれぞれ[kuan]及び[liɑŋ]となり、[k]及び[l]を声母と呼び、[uan]及び[iaŋ]を韻母と呼ぶ。[u][i]を介音、[a]を核母音、そして[n][ŋ]を韻尾と呼ぶが、介音又は韻尾又はそれら両方を欠く韻母もある。

現代北京語を例にとると、同じ母音を核とする音節に、次の4種がある。

<開口>	<合口>	<齊齒>	<撮口>
勒/lə/	洛/luə/	列/liə/	略/lüə/
川/san/	酸/suan/	先/sian/	宣/šüan/

介音のないものを「開口呼」、介音 u を含むものを「合口呼」、介音 i(または弱い i)を含むものを「齊齒呼」と呼ぶ。介音 ü は「i+u」(または i+u)の合体したもので、これを含むものを「撮口呼」と呼ぶ。

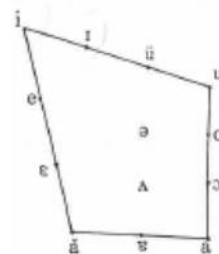
次に主な母音の音声記号を紹介する。人間の口腔を透視すると、ひずんだ四角になる。上方を上あご、左を口の前方、右を口の後の方として、主な母音の発音される場所を図示すると、上の表(1)-b 核母音図のようになる。

表(1)-a 中国語の音節

	声母	韻母		
		介音	核母音	韻尾
官	k	u	a	n
良	l	i	a	ŋ

I M V F

表(1)-b 核母音図



i は、前舌的で、音色のはっきりしたイ介音。i は中舌的で、あいまいなイ介音。

図 1 中国語の音節及び核母音

(2)中古漢字音

藤堂では、本文の見出しの各漢字に上古音(周・秦)、中古音(隋・唐)、「中原音韻」(元)及び北京語現代音を付している。中古漢字音節表は、隋・唐時代の標準的な発音に基づいて作成した。隋・唐時代を選んだのは、ほとんどすべての漢字がこの時期に日本に導入され、漢字の音が日本式に音訳されたからである(さきほどの「官」及び「良」は、「カン」及び「リヤウ」と音訳された。音訳の詳細については、本ホームページの「日本語における漢字の発音の歴史」参照。

(3)声母及び韻母

本表の声母は、隋唐時代の音として藤堂 p.1574 の表(3) 反切上字の表から採ったもので、下の表 1 に示すように 37 音ある。

本表の韻母は、隋唐漢語全体の韻母の体系として藤堂 p.1580~1582 から採った。使用されている母音は 13 音ある。本表の韻母では、列の記号(横方向にならんでいる)1~48(48 音)が開口呼(直音からなる)、49~112(64 音)が齊齒呼(介音として i 又は i が入る)、113~141(29 音)が合口呼(介音として u が入る)、そして 142~180(39 音)が撮口呼(介音として iu 又は nu が入る)である。したがって韻母は 180 音ある。まず縦方向に声母の音声記号を並べ、次に横方向に韻母の音声記号を並べた表を作成し、藤堂の見出し字を見ながら声母と韻母の組合せ欄に 1 音節の音声記号とそれに該当する例字とを記載していった。声母と韻母の組合せがない欄は空白になっている。その結果、中古漢字の

総音節数は、1877 になった。

藤堂がこれら声母・韻母の典拠としたのは、中国の韻書のうちもっとも広く活用されている『広韻』である。韻書とは漢字の発音について表したいわば発音字典で、隋の学者が編集した『切韻』(601 年)がその最初のものでされている。漢語には固有の音素文字がないので、「半切法」によって字音を表示している。たとえば、東＝徳紅反という形をとり、徳 tsk によって声母の t を表し、紅 fuŋ によって韻母の uŋ を表し、両者をつないで東＝tuŋ という字音を表す方法である。『切韻』という名称はのちに『唐韻』に、さらに『広韻』(1008 年)に改められて、収録字数を増やした。

(3)発音記号

上記の各漢字の音は、藤堂では国際音声記号によらず、漢字の音韻の表記で使われる音声記号で記されている。それら音声記号と国際音声記号との対比を以下の表に示す。

表 1 中古漢字音節表の音声記号

母音又は子音	藤堂音声記号	国際音声記号	国際音声記号の音の分類	藤堂音声記号の分類(上記表(1)-b 核母音図)及び備考	
母音	1	a	a	前舌広非円唇	後舌広
	2	ǎ	(æ)	-	前舌(国際音声記号の æ に近い音と考えられる)
	3	ʌ	ʌ	後舌半広非円唇	中舌半広
	4	ə	ə	中舌半広半狭の中間	中舌半狭
	5	e	e	前舌半狭非円唇	前舌半狭
	6	ě			藤堂に説明なし。国際音声記号にもなし。
	7	ɛ	ɛ	前舌半広非円唇	前舌半広
	8	i	i	前舌狭非円唇	前舌狭
	9	ɪ	ɪ	前舌中舌の中間かつ狭半狭の中間で非円唇	前舌中舌の中間かつ狭(ɪ は i より弱い音)
	10	ī	(なし)	(なし)	藤堂ではそり舌音の次の i を ī としている。(注記 1 参照)
	11	iu (ü)	y	前舌狭円唇	音声記号 ü は中舌後舌の中間(本文の中古音は、iu 又は ru で表記している)
	12	ru	ɻ	前舌中舌の中間かつ狭半狭の中間で円唇	
	13	o	o	後舌半狭円唇	後舌半狭
子音	1	k	k	舌背軟口蓋破裂無声無気音	以下子音は藤堂 p.1574 の表(3)反切上字の表による直音および拗音(同表の記載事項。以下同じ)
	2	k'	k ^h	舌背軟口蓋破裂無声有気音	k のイキの出た音(有気音)直音および拗音
	3	g	g	舌背軟口蓋破裂有声無気音	拗音
	4	ŋ	ŋ	舌背軟口蓋鼻音	直音および拗音
	5	h	h	咽喉声門無声音	直音および拗音
	6	ɦ	ɦ	咽喉声門有声音	h の濁音で、喉鳴りをさせる音

					直音
	7	・	-	-	のどをしめてから咳をするときの音。直音
	8	y	j	硬口蓋化音	拗音
	9	ɥ	ɥ	有声両唇硬口蓋接近音	拗音。(注記2)参照。
	10	t	t	舌頂歯茎破裂無声無気音	直音
	11	tʰ	tʰ	舌頂歯茎破裂無声有気音	直音
	12	d	d	舌頂歯茎破裂有声音	直音
	13	n	n	舌頂鼻音	直音
	14	l	l	舌頂側面接近音	直音および拗音
	15	t̚	t̚	舌頂そり舌破裂無声無気音	t の舌の尖をそらせた音(そり舌音)。以下藤堂の音声記号の子音の下に付くドットはそり舌音を意味する。
	16	t̚ʰ	t̚ʰ	舌頂そり舌破裂無声有気音	
	17	d̚	d̚	舌頂そり舌破裂有声音	
	18	n̚	n̚	舌頂そり舌鼻音	
	19	ts	ts	破裂歯茎無声無気音	直音および拗音
	20	tsʰ	tsʰ	破裂歯茎無声有気音	直音および拗音
	21	dz	dz	破裂歯茎有声音	直音および拗音
	22	s	s	舌頂歯茎摩擦無声音	直音および拗音
	23	z	z	舌頂歯茎摩擦有声音	拗音
	24	tʃ̥	tʃ̥	破擦そり舌無声無気音	現代中国語拼音 zh と同音
	25	tʃʰ	tʃʰ	破擦そり舌無声有気音	現代中国語拼音 ch と同音
	26	dʒ	dʒ	破擦そり舌有声音	
	27	ʃ̥	ʃ̥	舌頂そり舌摩擦無声音	現代中国語拼音 sh と同音
	28	tʃ	tʃ	破擦後部歯茎無声無気音	英語の教会 church の ch の音
	29	tʃʰ	tʃʰ	破擦後部歯茎無声有気音	
	30	dʒ	dʒ	破擦後部歯茎有声音	英語の裁判官 judge の終わりの音
	31	ʃ	ʃ	舌頂後部歯茎摩擦無声音	英語の shirt の sh の音
	32	ʒ	ʒ	舌頂後部歯茎摩擦有声音	英語の vision の si の音
	33	ʃ̚	ʃ̚	舌頂そり舌摩擦有声音	舌の尖をわずかにそらせ、舌面を上あごに近づけて摩擦させた音。ジを発音しつつ、少し舌の尖をそらせるとよい。現代中国語拼音 r と同音
	34	p	p	両唇破裂無声無気音	直音および拗音
	35	pʰ	pʰ	両唇破裂有気音	直音および拗音
	36	b	b	両唇破裂有声音	直音および拗音
	37	m	m	両唇鼻音	直音および拗音

(4) 中古漢字音と現代標準漢字音との違い

主な相違点は表 2 のとおりである。

表 2 中古漢字音と現代標準漢字音との違い

番号	項目	中古漢字音	現代標準漢字音
1	母音の数	表 1 のとおり 13	三省堂の「中国語音節表」によれば 16*
2	声母の数	38(ゼロ子音含む)	25(ゼロ子音含む)
3	韻母の数	180	39
4	無声音(清音)・有声音(濁音)	10 組	1 組(拼音の sh と r)
5	無気音・有気音	7 組	6 組
6	そり舌音の数	7	4
7	入声**の音節数	65	0
8	韻尾が[m]の音節数	11	0
9	総音節数	1877	407

*i [ɿ][ʅ][ɪ][i], a [A][a][ɑ][ɛ], o [o], e [ɤ][e][ə][E], ê [E], u [u][ʊ], ü [y]の 16(拼音の次の[]内に音声記号を示す)

**入声とは韻尾(音節の末尾)に[p][t][k]のいずれかの子音を含む音節を言う。

上の表から中古漢字音は、現代標準漢字音に比べて韻母の数が非常に多く、無声音(清音)・有声音(濁音)の組数とそり舌音の数が多く、また現代標準漢字音では中古漢字音の入声及び韻尾が[m]の音節が消えてしまったため、中古漢字音の総音節数が極めて多くなっていることが分かる。

(注記 1)

発音記号 \dot{i} は、藤堂の本文の中古漢字音ではそり舌音の後に表れるが、上記韻母の体系及び図 1 の核母音図には表れない。三省堂「クラウン中日辞典」(2008) (以下三省堂)によれば現代中国語のそり舌音の拼音 chi の発音記号は[ʧʰɿ]となっている。したがって、藤堂の \dot{i} は、三省堂の $\dot{\imath}$ と同じ母音をあらわしていると考えられる。ただし、 $\dot{\imath}$ も国際音声記号にはない。また藤堂の \dot{s} は三省堂 p.1524 の「中国語音節表」の拼音 sh の発音記号 \dot{s} と同一のそり舌音である。 \dot{i} の例として藤堂 p.88 に側 $\dot{t}\dot{s}\dot{i}\dot{a}k$ 、p.542 に揣 $\dot{t}\dot{s}'\dot{i}u\dot{e}$ 、p.593 に戻 $\dot{t}\dot{s}\dot{i}\dot{a}k$ が見られる。藤堂本文の発音記号中の \dot{i} は、とりあえず i の欄に記載した(たとえば、本文でその音節の声母が $\dot{t}\dot{s}'$ であり韻母が $\dot{i}u\dot{e}$ であれば、本表の声母が $\dot{t}\dot{s}'$ で韻母が $i\dot{u}\dot{e}$ の欄に $\dot{t}\dot{s}'\dot{i}u\dot{e}$ と記載した)。

(注記 2)

国際音声記号の表では \dot{q} は別表その他の記号で「有声両唇硬口蓋接近音」としている。 \dot{q} は藤堂 p.1574 の表(3)反切上字の表、p.1576 の表(4)-a 隋唐漢語の声母表と表(4)-b 韻書反切からみた隋唐の三七声母表に記載されている。本表には p.1574 の表(3)反切上字の表の(\dot{q})の項に掲載されている

漢字の音を記載したが、これらの漢字すべての声母が、藤堂字典本文の中古漢字音では **fi** になっている。p.1576 では「**fi** が **i** の前に立つとき **fi**→**q** となると考えるのが適切であろう」としているので、藤堂本文で中古漢字音の音声記号が **fi** から始まる漢字については音声記号の **fi** を **q** に置き換えて漢字の発音の声母を **fi** から **q** に変更した。たとえば、「偉」の中古漢字音は藤堂本文では **fiuəi** であるので韻母は撮口呼に属するが、**fi** を **q** に置き換えて **quəi** とすると韻母は合口呼に変わる。Ŧuě(為)、Ŧuei(衛)、Ŧuěŋ(筠)、Ŧuən(円)、Ŧui(位)及び Ŧuět(汨)については、それぞれ韻母 **uě**、**uei**、**uěŋ**、**uən**、**ui** 及び **uět** が中古漢字音にないので、それぞれ藤堂の本文どおり **fiuě**、**fiuəi**、**fiuěŋ**、**fiuən**、**fiui** 及び **fiuět** として濁音 **fi** の撮口呼の行に記載した(括弧内はその音声記号をもつ漢字の一例)。なお **fiu** (于)は、**fi**→**q** とすると **qu** となるが、中古漢字音の声母に **u** がない。藤堂 p.1581 によれば、「隋唐の漢語には、**o** のほかに **u** という独立した韻母がないので、**o**~**u** の間のずれは許された」とあるので、**fiu** は **qo** として韻母 **o** の列に記載した。

(2019.10.8.)